

二年前。かつて『サラダ記念日』に魅せられて、真似事をしていた短歌を、本気で勉強したいと思っだしていた。雲の上の人だと思っていた伊藤氏ではあったが、それこそ私の高校時代の「師」の紹介を思いがけず得、恐れ多くも、夢と現実が一つとなることとなった。この奇跡のような出会いの日々を無為に過ごしては、まさに獅子に千尋の谷に突き落とされるのではないか。

このように、夢のごとき伊藤氏との師弟関係は薄く、薄く始まったところである。

堺雅人がかのエッセイを締め括っている、「伊藤一彦や牧水が師匠スジにあたる」との言葉を、是非我が物にするため、日々精進すべし、と心新たにした平成最後の新年である。

**奥山かほる** 隅田川テラスが好きだ。川沿いの石のベンチに座ると、対岸にスカイツリーや高層ビルが聳え立ち大川との調和を主張する。昨夏の夜の屋形船で、幻燈の

ようにぼんやり灯りながら擦れ違う船に乗る自分を見たと思った。

川面が夕日の色に染まる頃話した若い女性の軽く涼しい声。声はその肉体に一生付いて回る宝石のようでその人を表わす発信器だ。

声と同じに変わらぬのは指紋とか顔。松本清張『砂の器』は顔の認知力が優れていた為に殺される男と犯人の話だ。有名作曲家の写真からあの時の少年だと直感したのだった。

いっぽう福岡伸一は言う、人の細胞は日々新しくなり、一年後には別の人間に入替わっていると。

では服装や髪型が変わっても瞬時に夫や妻をその人と判断して疑わない日常の方がむしろ不思議ではないか。(私の友人は俳優の髪型が違うと途端に誰か判らなくなるらしい。)なぜ他人と取り違えたりしないのか。人物特定に至る決め手はやはり顔だろう。顔は標識に似た、各人固有の(記号)だから。

ところが最近アイデンティティの危機に直面した。マイナンバー

カード用に古い証明写真を流用したら私本人との顔一致度が五九%という低い値。過去の私の無効である。私という一貫性は時間の経過と機械の前に吹っ飛んでしまいうさだ。(眉毛も描かずに受領に行つた二重の過失を江東区役所担当者にお詫びしたい)

隅田川テラスで夕風に吹かれながら、体の内で私を変えていく血管の川の流れを思った。

**奥村知世** 子どもが職業体験をするキッザニアという施設がある。さまざまな職業が用意され、三歳から十五歳までが「仕事」をする。キッザニア通貨で給料も出る。四

歳の長男と何度か行ってみた。それぞれの仕事には制限が用意され、例えば小さな作業着にヘルメット姿の子どもは大変かわいらしく、親ははしゃいで写真を撮るのである。

人気職業はお菓子工場、めがね屋、絵の具屋、はんこ屋と、現実社会とはずいぶん違う。ちなみに弁護士や証券コンサルタントもあるが、不人気だ。

長男は消防士がお気に入り仕事だ。訓練をして、耐火服を着て消防車で火災現場に向かい消火活動をする。職業体験をさせるため、キッザニアの街では三十分一度火事が起こる。

ちなみに三十分一度は男の子(人形)が心肺停止して救急隊が駆けつけて蘇生するし、警察官がパトロールに来るし、キッザニアの街は非常に騒々しい。一日に二回、結婚式も催される。

稼いだ通貨で買える物もできる。買えるのはちよつとした文房具程度だが、自分で支払いまでする買い物は四歳児には冒険だ。なんと電子マネーにも対応しており、チャージしておけばカードを出すだけでいい。得意気な顔でブタのクリップを買ってきた。

子どもが楽しく仕事をし、その様子をどれだけ見てもとがめられず、嬉しそうに給料を持って子どもが自分の所に帰ってくる。箱庭のようなキッザニアの街は、親にとってこそ夢の国なのだろう。